



# 『道産子の東京日誌～ 帯広でも杉並でも “地域”と関わっていたい！』

竹川暢さん 和田中学校土曜日学校「ドテラ」ボランティア

プロフィール：1973年、北海道芽室町生まれ。帯広市役所職員。

現在は文部科学省生涯学習政策局へ出向中。和田中学校の土曜日学校でのボランティアに加え、男性読み聞かせグループの活動など、杉並区でも活躍中。

## ■杉並デビューは「ドテラ」から



私立のブランド校でもない、文部科学省のモデル校でもない区立中学校が、全国から注目されている。2003年春、社会の第一線で働くビジネスマンだった藤原和博氏が、都内で初めて民間人の公立中学校校長に就任した、杉並区立和田中学校である。

新しい校長先生とPTA、保護者との懇談を通じて校庭の芝生を維持管理するグリーンキーパーパスが組織化されたことを契機に、今では地元の人たちを中心にして学校を支える「和田中地域本部」が出来ている。竹川さんが活動する「ドテラ」は土曜日に学校を開放して、大学生や教職資格を持ったボランティアなどに来てもらい、学習のサポートを行うというもの。学校では先生と生徒、家では親と子どもといった上下の関係性だけに終始しがちなので、こうした“ナナメの関係”を重視している。ドテラの登録者数は、現在約80名。最年長者が、1973年生まれの32歳、竹川暢さんである。

実は竹川さん、杉並区の住民ではない。現在は文部科学省生涯学習政策局政策課に出向中だが、北海道帯広市役所の職員なのである。藤原校長の著書を読み、ぜひ現場に関わりたいと考え、和田中学校に出かけ

ていくと、運良く藤原校長が在席しており、ドテラに参加したい旨を伝えると、「ああ、いつでもどうぞ！」と気軽な返事が返ってきた。「なんと風通しの良い学校だろう！」、竹川さん、早速ドテラに関わり始めることになった。

土曜日の午前中、約2時間30分、他のボランティアと一緒に、中学生相手に学習の手伝い(英語担当)をしたり、時には人生相談にも乗ったりする。子どもたちが少しずつ成長していく過程に寄り添えること、意欲あるボランティアの人達と一緒に活動できることが何よりうれしいそうだ。一方で、“教える”ことの難しさも感じるという。子どもから教わることも多い。そんなとき、中学校の教師だったお父さんの姿を思い浮かべているのだろう。

## ■目立ちたがり屋のお役人さん



▲夢降夜(ゆめふるや)ホームページ

竹川さんは、北海道芽室町の生まれ。芽室町出身者には、大相撲の元横綱大乃国(現・芝田山親方)がいる。名の通り、身長189センチ、体重200キロの巨漢力士だった。1988年九州場所千秋楽、昭和最後となった一番で53連勝中の千代の富士に土をつけた、あの名勝負を記憶している方も少なくないだろう。ちなみに、芝田山部屋は杉並区高井戸東2丁目、京王井の頭線高井戸駅から

徒歩2分のところにある。

豊かな自然が広がる十勝平野で育った竹川さん、子ども時代は外で友だちと遊ぶことが多かったが、音楽好きのお母さんに連れられて、4歳の時からピアノを習い始める。プロの音楽家にはならなかったけれど、役所の仲間とバンドを結成するなど、趣味として音楽とのつきあいは続いている。

地元志向だという竹川さんは、東京の大学院で経済学を学ぶが、卒業後は地元に戻り、帯広市役所に勤務することとなる。総務部庶務課で始まった役人人生は、やがて企画部企画課へ移り、当時の市長が提案した「ユニバーサルデザインによるまちづくり」に携わったことから、ものづくりやイベントへの関わりが生まれ、仕事の枠も広がった。縦割りといわれる行政にあって、横断的な企画課での仕事は、元々“目立ちたがり屋”だという竹川さんの好奇心に火を付けたのかもしれない。仕事を離れたところでも、地元の若者たちを中心に平原祭り初日のメインイベントとして『夢降夜(ゆめふるや)』という新しい祭りまで作ってしまった。インターネット上の夢降夜のサイトには、「…彼(竹川さん)が帯広に戻る時、いかに夢降夜が大きく成長しているか。気を抜くとすぐにでも東京から戻り、渴を入れられることは間違いない。竹ちゃん早く戻ってきてね…」と、仲間のコメントが掲載されており、ホームグラウンド帯広の仲間の信頼の厚さをうかがわせる。

竹川さんにとっての“地域”とは、そこに縁のある人々との関わり、そのものなのだろう。そういう意味では、帯広も杉並も、竹川さんにとって“地域”の違いはない。

## ■男性読み聞かせグループ 「パパ読みたい」誕生秘話



▲読み聞かせグループの活動の様子

絵本や児童書の読み聞かせといえば、女性が多い。お話を女性の声で聞くと「優しさ」と母性を感じさせるが、男性が読むと「安心」と包容力を示すため、子育てでは父親の読み聞かせも求められている。最近、お父さんの読み聞かせグループも各地で活動している。杉並区でも、昨年、男性向けの読み聞かせボランティア養成講座が開催され、竹川さんも参加した。受講しようと思ったきっかけは、普段ドテラで関わっている中学生よりも、もっと年齢の低い子どもたちとも関わりを持ちたいと思ったからだ。その背景には、竹川さんのわが子への想いがある。現在、竹川さんには2歳7か月になるお嬢さんがいる。帯広へ帰省するときはいつも絵本を買って帰り、お嬢さんに読んであげることになっている。帰省するごとに、次々に言葉を覚え、感性も豊かになっていく。そんな、子どもの成長を肌で感じられることが何よりの楽しみだという。しかし、単身赴任の身では、毎日というわけにはいかない。それなら、せめて他の子どもの成長に寄り添いたいという気持ちがあった。また、竹川さんが幼かった頃、ご両親が、よく読み聞かせをしてくれたという。一番のお気に入りだった絵本『うみぼうずのにらめっこ』（峠兵太作・小松修絵、金の星社、1976年発行）は、今も彼の手元にある。

企画マンで、かつ行動的な竹川さん。講座修了と同時に、受講者を巻き込んで、読み聞かせグループを結成する。その名もずばり「パパ読みたい」。孫に絵本を読んであげたいグランパも含めて、総勢6名でのスタートだった。すでに、杉並区で開催される子育て関連のイベントなどで、実際に読み聞かせを行っている。そして、すっかり“はまった”という。

高度な読み聞かせの技術があるわけではない、だから、当初は自信がなかった。しかし、実際に始めてみると、読み聞かせは技術（だけ）ではない、ことを実感する。絵本の世界に入り込み、真剣に話に耳を傾ける子どもたち。生き生きとした表情を見ていると、意欲をかきたてられるのだ。子どもたちの成長に寄り添いたい、そして自分も子どもたちとともに学びたい、だから、やはり技術も磨きたい。良い意味での欲も出てきた。ドテラでのサポーターに加え、「パパ読みたい」の一員として、竹川さんの“地域”への関わりはますます深まっていきそうだ。

—2006年4月24日掲載—